

神秘学ポエジー 風遊戯
photopos
123

【神秘学ポエジー～風遊戯 第 246集】 photo ヴァージョン

photopos 3051-3075

《2023.1.15～ 2023.2.8》

神秘学遊戯団

☆photopos-3051

2023.1.15



わたしは
永遠の
マトリョーシカのような

わたしを
ひらけば
またわたし

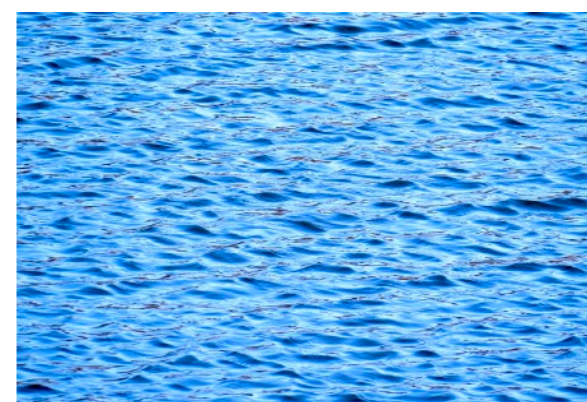
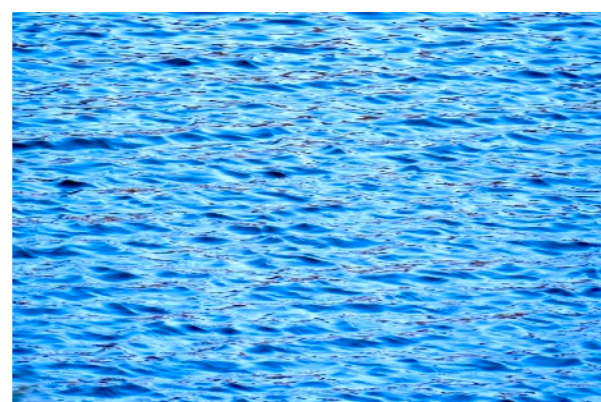
そのわたしを
ひらけば
またわたし

わたしは
わたしだ

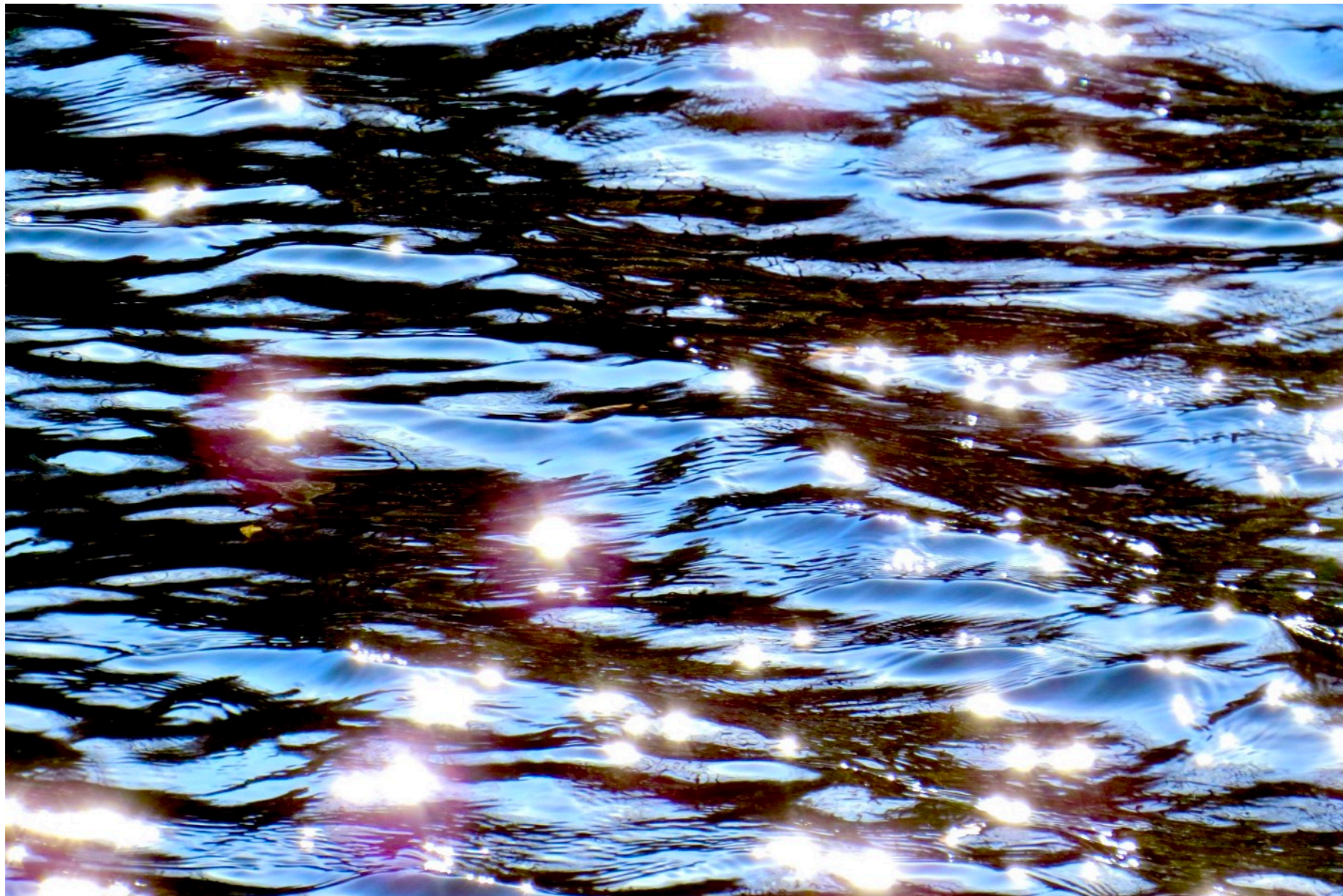
けれど
わたしは
変わる

わたしは
変わって
わたしになる

そのわたしも
変わる
変わって
わたしになる



※愛媛県総合運動公園にて



そこに門がある

通るためには
歌を歌わねばならない

詩を書くことが
もはや野蛮になり
天使さえ歌えない時代

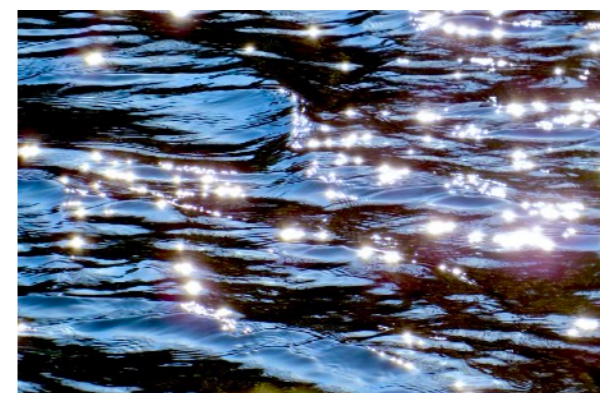
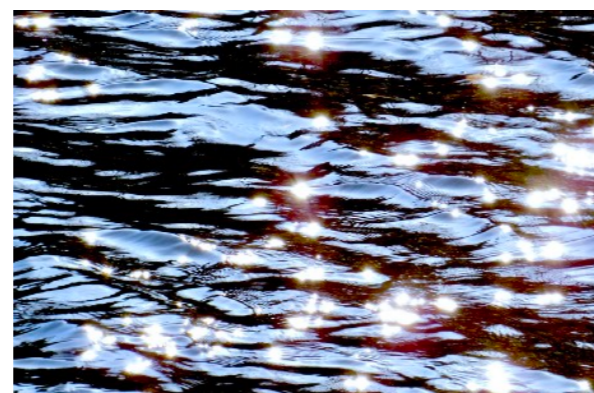
そんな時代にこそ
ひとは歌わなければならない

過去の歌は
もはや失われている

新たな歌を
歌わねばならない

門の向こうにある
見えない彼方へ

光を紡ぐように
天使ではなく人間こそが





人間であることが
たまらなく愛しくなることがある

人間であることが
たまらなく嫌になることもあり

人間であることを
超えていきたくすることさえある

それでも
人間は人間である

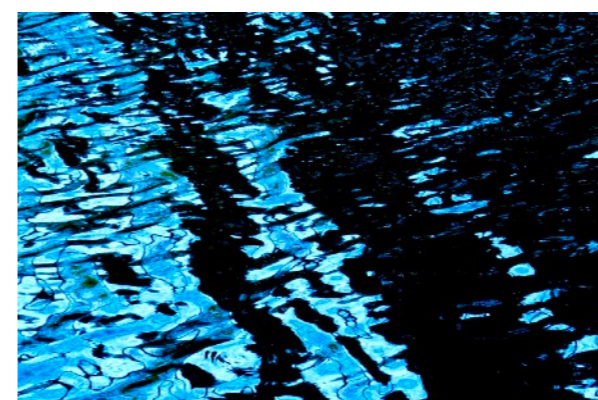
人間は人間であることを
やめることができない

人間を超えた存在が
人間を愛しく思いあるいは嫌悪し
また人間を超えた人間へと導こうとしても

それでも
人間は人間である

愚かであれ
賢明であれ
闇を歩むにせよ
光を歩むにせよ

人間は人間であること
それそのものに
存在理由があるのだから





どこにも行けなくなるときには
どこにも行かないのがいい

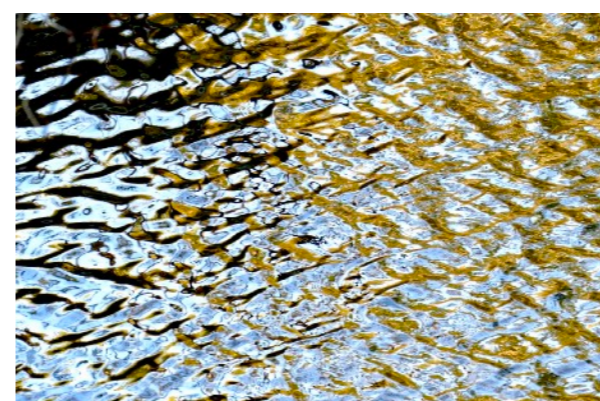
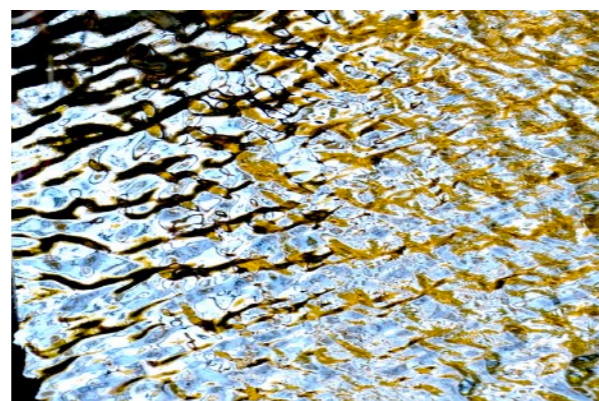
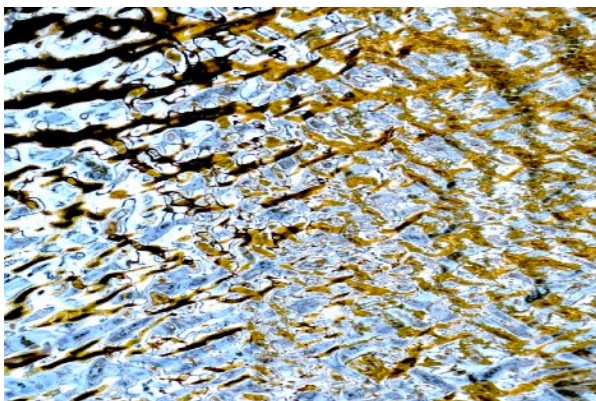
どこかに行くとき
そのどこかは
決められたどこかだから
それとは別のどこかが見えてくるまで

なにもできなくなるときには
なにもしないのがいい

なにかをするとき
そのなにかは
決められたなにかだから
それとは別のなにかが生まれてくるまで

言葉をなくしてしまったときには
なくしたままでいるのがいい

言葉をつかうとき
その言葉は
決められた言葉だから
それとは別の言葉が訪れてくるまで



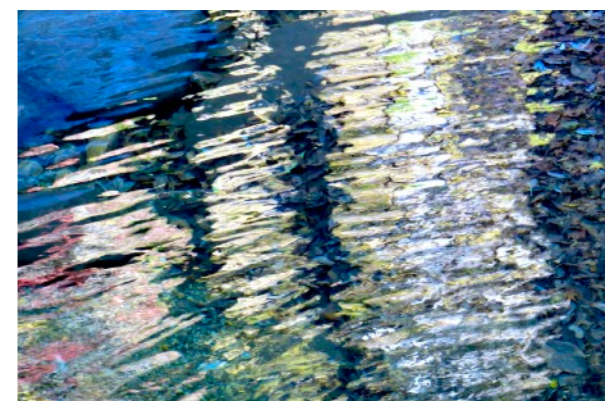
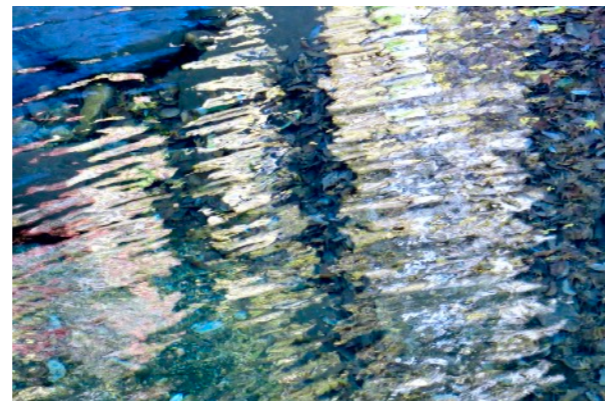
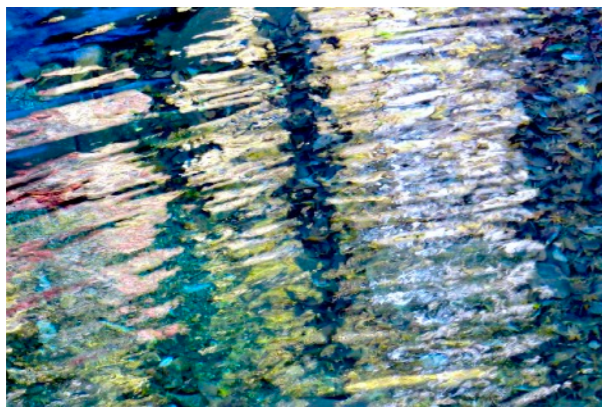


立ち止まる
立ち止まることで
それまで見過ごしていたものに気づく

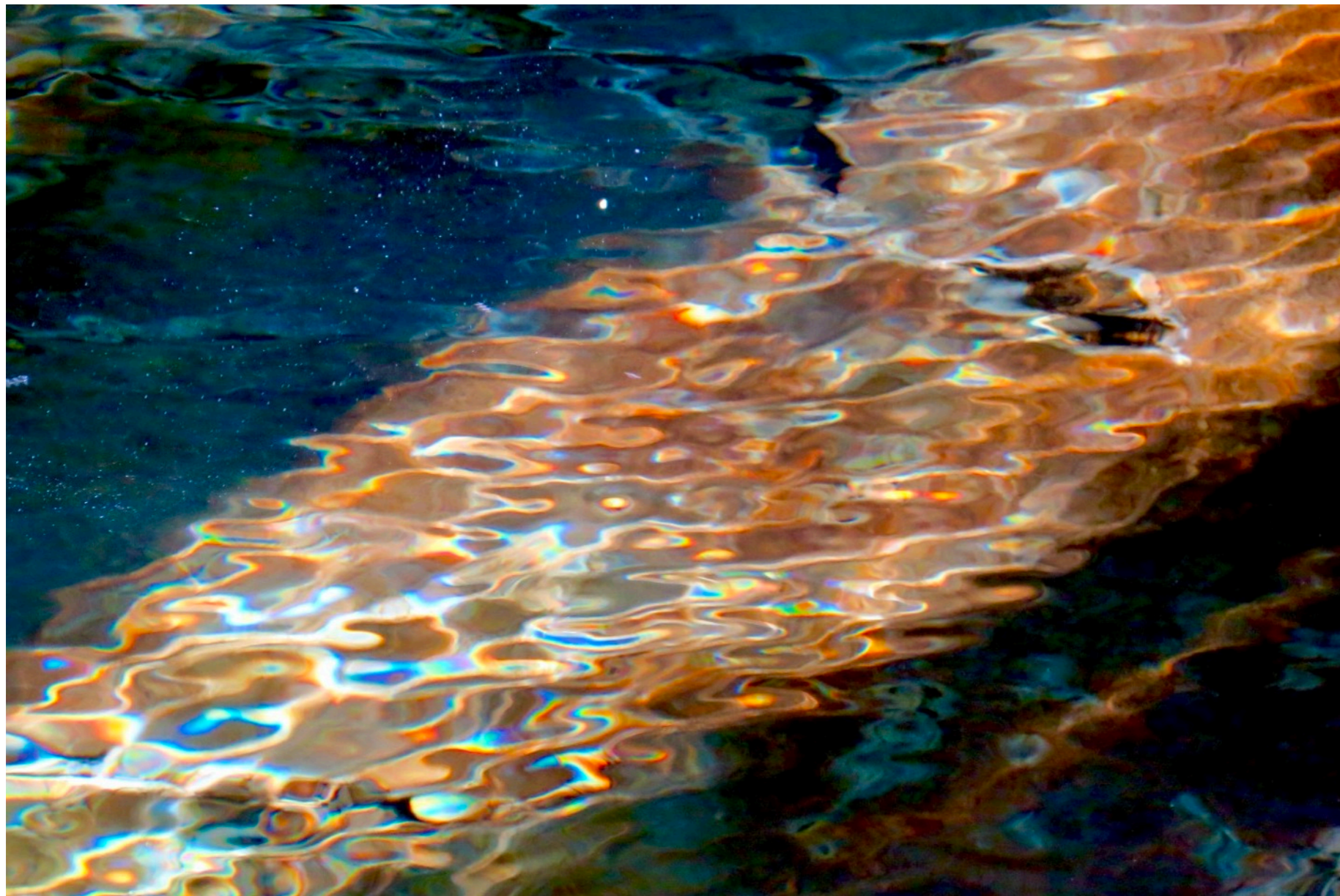
見つめる
見つめることで
見えていなかったものを観る

ここにいる
ここにいることで
変わらないじぶんと
変わっていくじぶんに出会う

とにもある
とにもあることで
それまで知らないまま
与えられてあったことへとひらかれる



※愛媛県北宇和郡松野町・滑床溪谷にて



こんな顔かい
と振り向いたのっぺらぼう

その顔は
ほんとうか嘘か

仮面を外して
見せた顔

その顔もまた
仮面かもしれない

どこからどこまでが
ほんとうで
どこからどこまでが
嘘なのか

ひとも
世界も
ほんとうの姿は
わからない

わからないけれど
わからないままに
わからないからこそ
それを問いつづけながら
生きられるのかもしれない



☆photopos-3057

2023.1.21



愛されないと
嘆くよりも
愛せないことを
悲しむのがいい

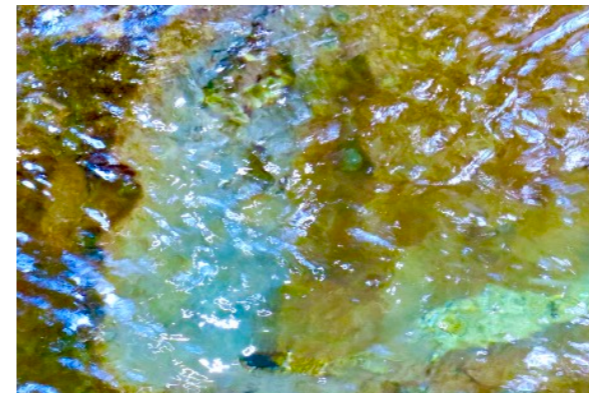
愛は
愛すること
そのもののなかにあるから

だれかの悪を
裁くよりも
じぶんの悪を
見据えるのがいい

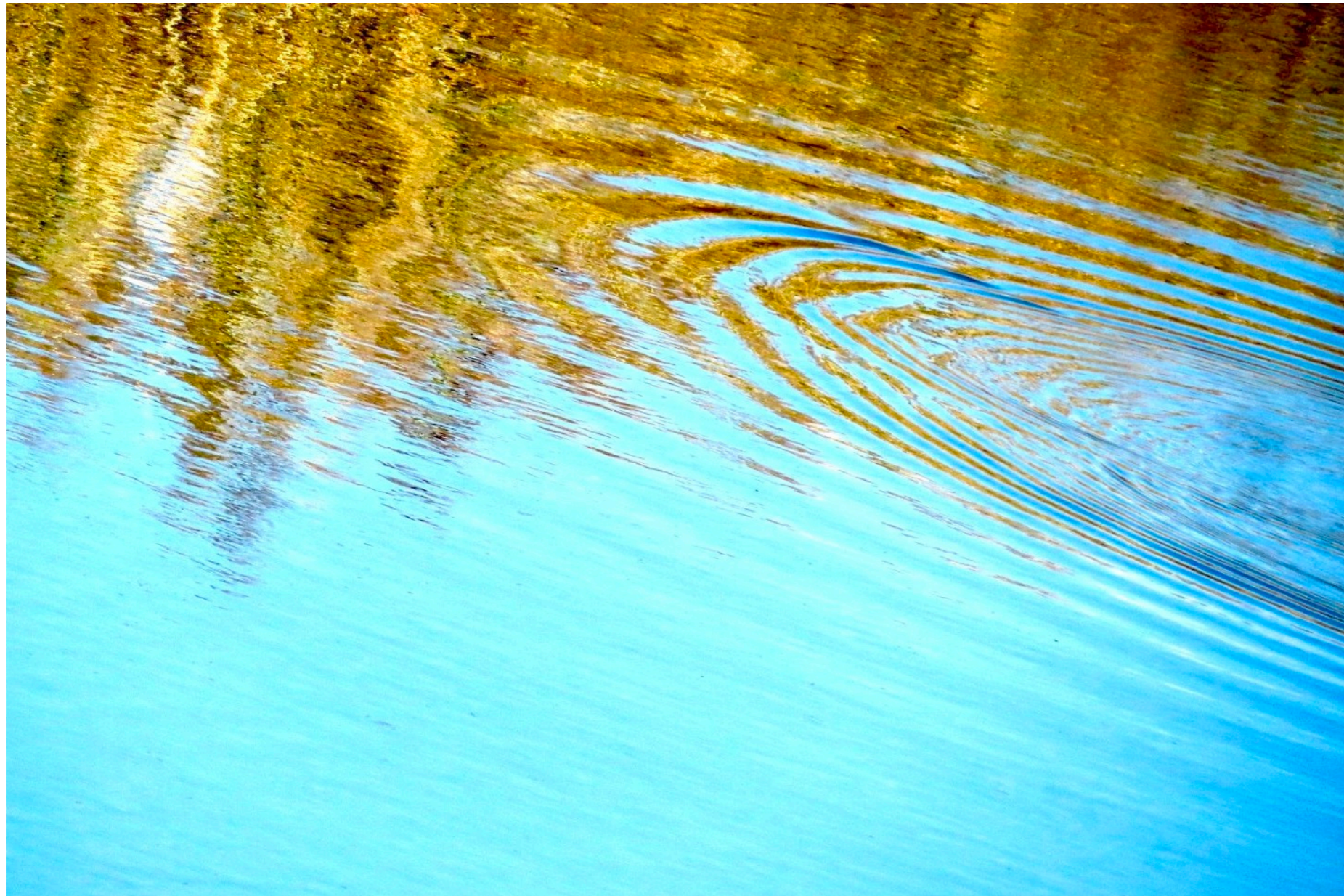
悪は
みずからの悪に
気づけないところにあるから

知らないことを
恥じるよりも
問うことを
やめないことだ

知は
無知を知ること
そのもののなかにあるから



※愛媛県北宇和郡松野町・滑床溪谷にて



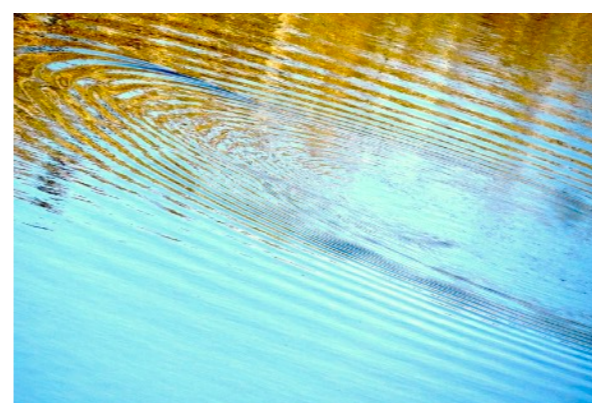
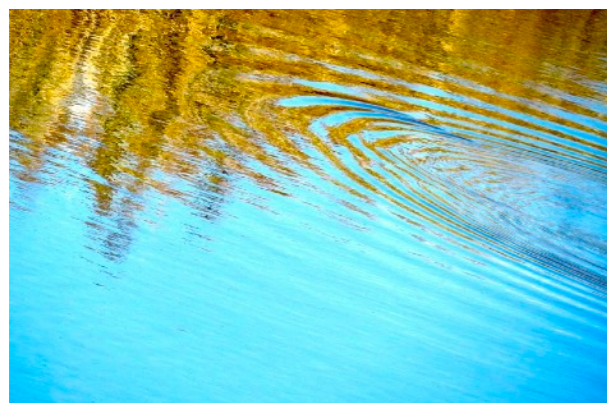
はじまりは
おわりへと
つながり

それはまた
はじまりへと
つながり

そのことを
しらぬまま
わたしは
わたしたちは

おわることを
おそれとまどい
はじまりと
おわりのあいだを
くりかえしめぐり

それがなにかは
わからぬまま
まだみぬ
あらたなものへの
いのりとともに
いまここで





救われないのは
なにが救われないでいるのだろう

救われるとき
だれが救うのだろう
そしてなにが救われるのだろう

救いのその先にはなにがある

赦されないのは
なにが赦されないでいるのだろう

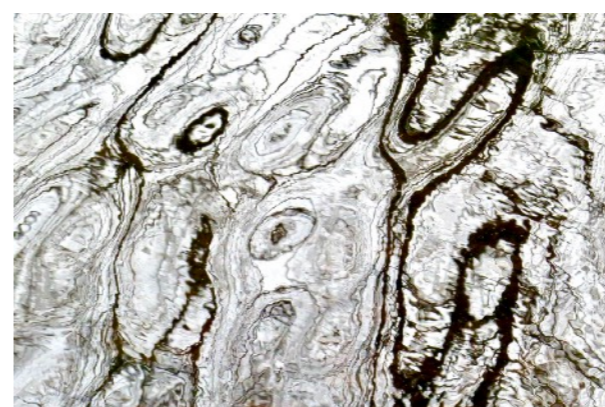
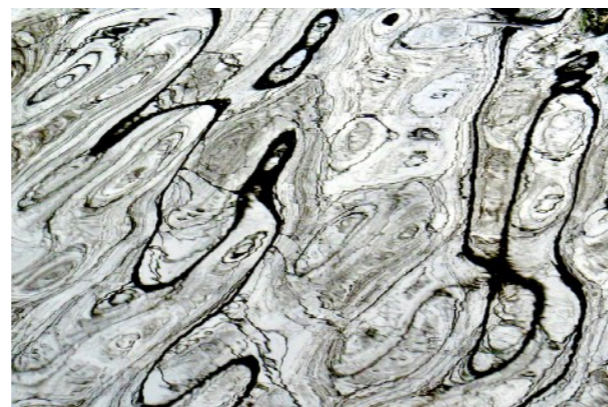
赦すとき
だれが赦すのだろう
そして何を赦すのだろう

赦しのその先にはなにがある

悟れないのは
なにが悟れないでいるのだろう

悟るとき
だれが悟るのだろう
そしてなにが悟るのだろう

悟りのその先にはなにがある

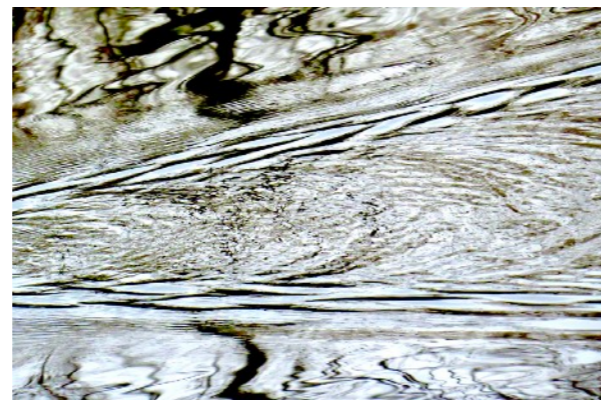




風が渡り
水の流れるなかを
わたしは
わたしたちは
どこから来て
どこへ行くのかを
知らずにいる

くりかえし
くりかえし
問われつづけてやまない
問いのまえで
わたしには
わたしたちには
なにができるのか
なにを語れるのか

風は渡り
水の流れるなかを
わたしは
わたしたちは
いまどこにいるのか
それさえも
見えないままでいるのに
いまという時が
いつなのかさえわからずにいるのに



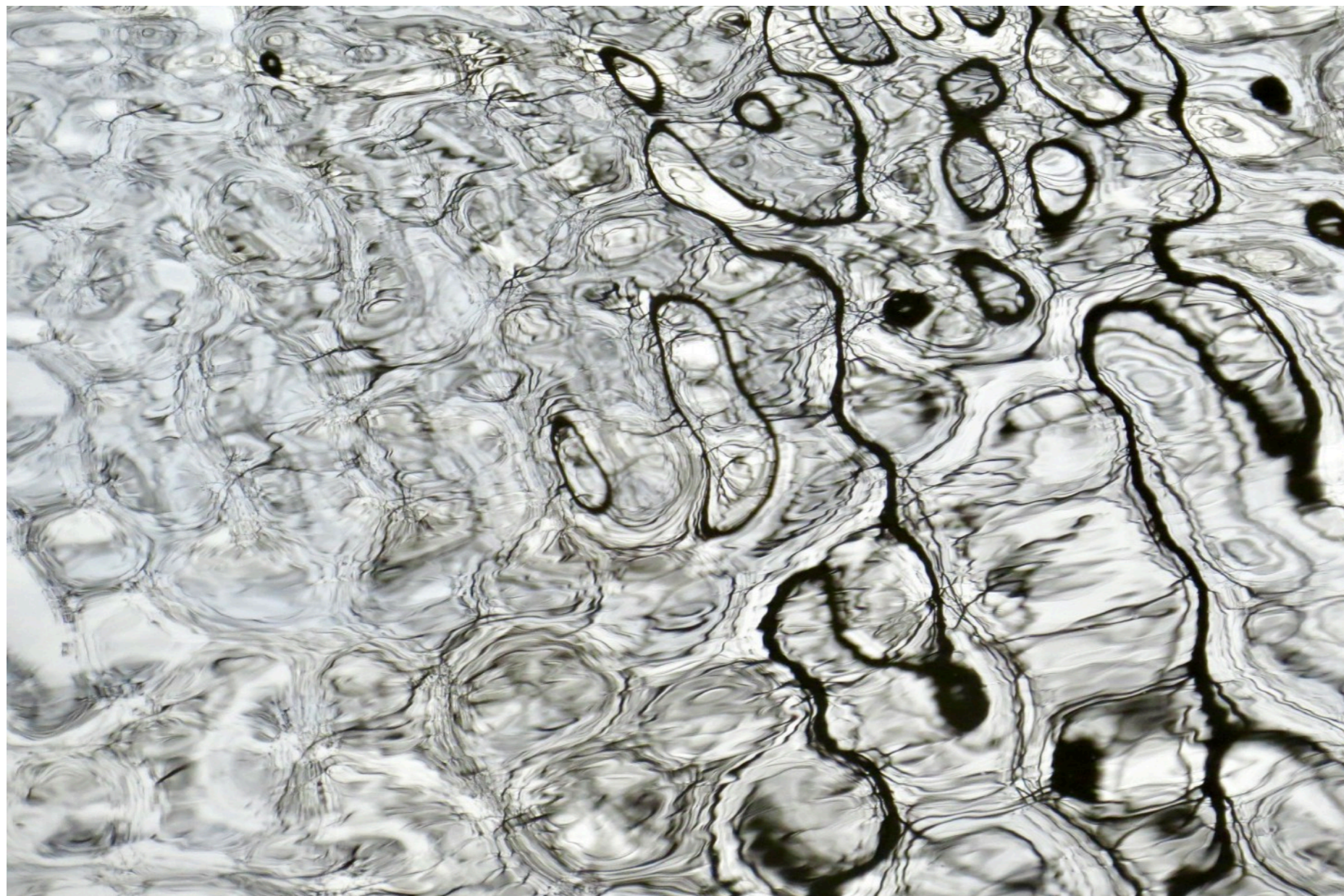


上はそのまま上であることにはならず
下はそのまま下ではあることにはならず
上は下ともなり下は上ともなり
上のなかに下はあり下のなかに上はあり
上は下を照らし下は上を照らし

キレイはそのままキレイではあることにはならず
汚いはそのまま汚いであることにはならず
キレイは汚くもなり汚いはキレイともなり
キレイのなかに汚いはあり汚いのなかにキレイはあり
キレイは汚いを照らし汚いはキレイを照らし

知はそのまま知であることはできず
愚はそのまま愚であることはできず
知は愚ともなり愚は知ともなり
知のなかに愚はあり愚のなかに知はあり
知は愚を照らし愚は知を照らし





なにが善いのか
悪いのか

善と悪とは
シーソーゲーム
バランスをくずしたときは
善も悪となる

薬も毒となり
毒も薬となる

少なすぎても
多すぎても
善きことは
善きことにはならず

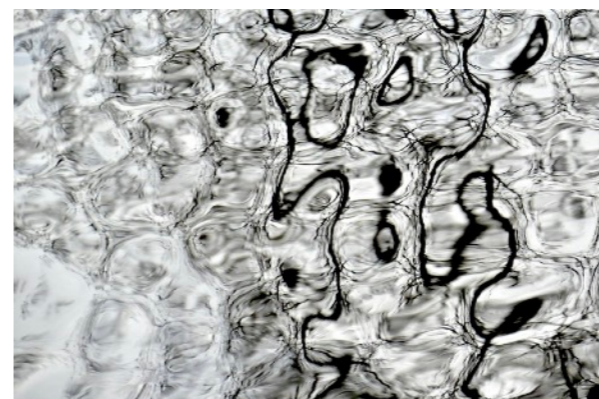
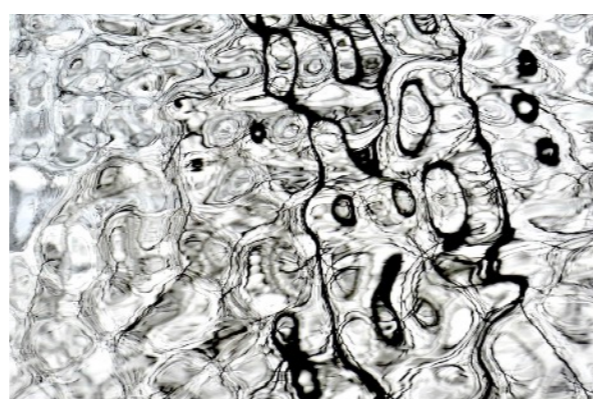
善いとされていても
必要な時と所
それ以外では
善とはならず
悪ともなってしまう

善に見せかけた
悪もあり
悪と見える
善もある

薬に見せかけた
毒もあり
毒とされながら
薬もある

なにが善いのか
悪いのか
なにが薬か
はたまた毒か

問いを忘れて気がつけば
知らぬまに
バランスシートは真っ赤っ赤





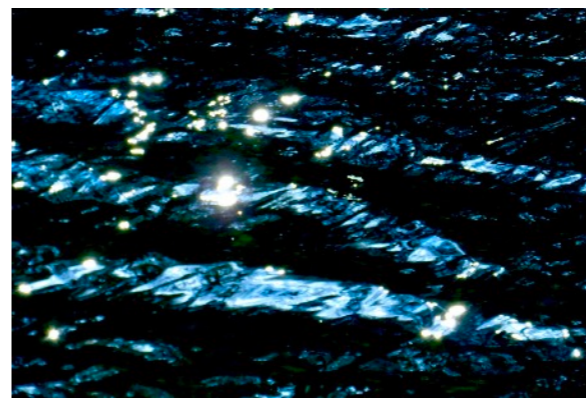
星座が12あるのは
太陽の12の異なった顔が見えるということだ

ひとつひとつの太陽の顔は
世界を異なった方向から見ているから

じぶんのなかにある
太陽の12の顔を
そして太陽だけではなく
惑星の12の顔もあわせて見るとき
それらがたえず動きながら
わたしという宇宙を照らしているのがわかる

ひとつの太陽の顔から
ひとつの惑星の顔から
見えている世界も
ほかの太陽や惑星から見れば
ずいぶん違って照らされて姿をあらわす

その多次元世界のなかで
わたしは何を見るだろうか
見ようとするだろうか



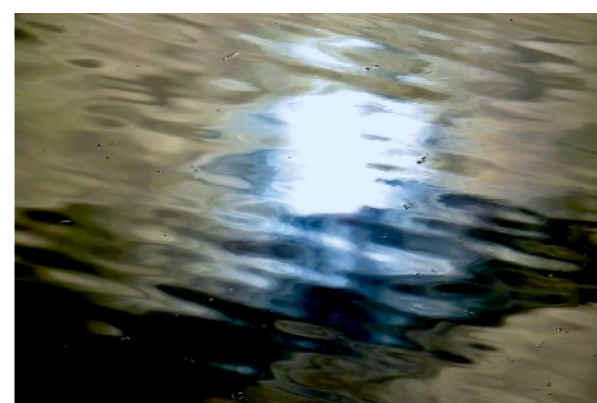
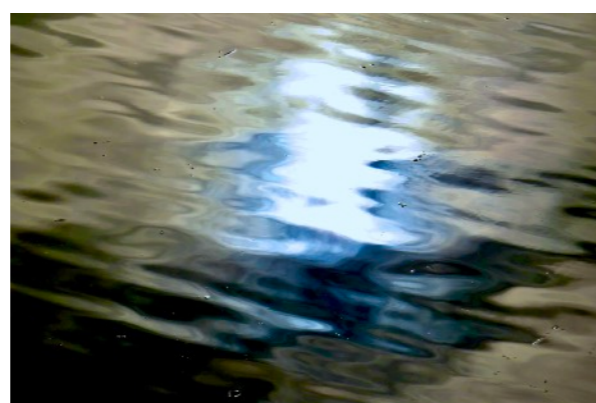
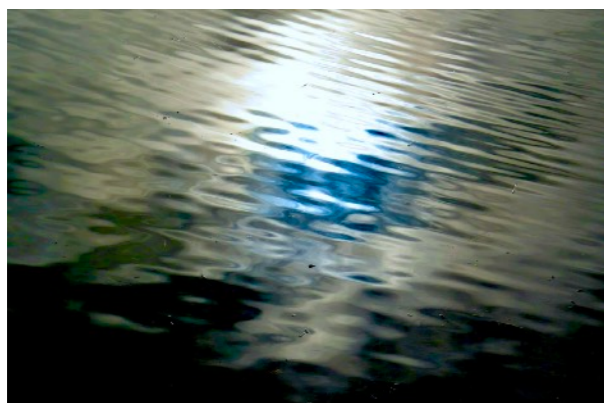


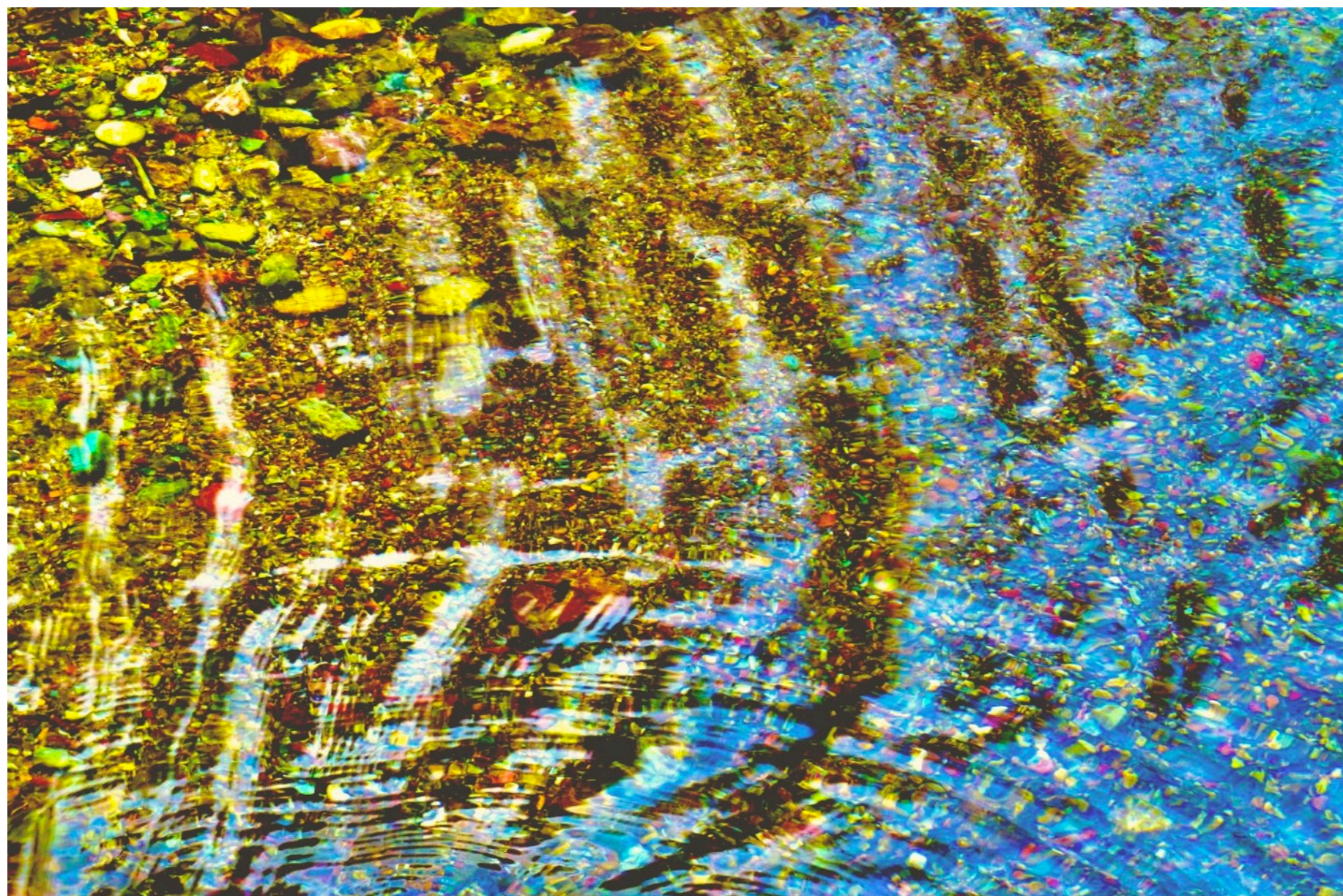
どんなところに
閉じ込められたとしても
自由でいる
壁の外を生きられるように

どんなことを
教えられたとしても
みずから学ぶ
知恵の光を見出せるように

どんなに
命じられたとしても
従わないでいられる
自動人形にならないように

どんなに
与えられたとしても
与えることを忘れない
愛を生きられるように





見えない川は
いまでも流れている

流れているはずの水を
見つけるために

わたしたちは
内なる川を
探さねばならない

見えない道は
いまでも続いている

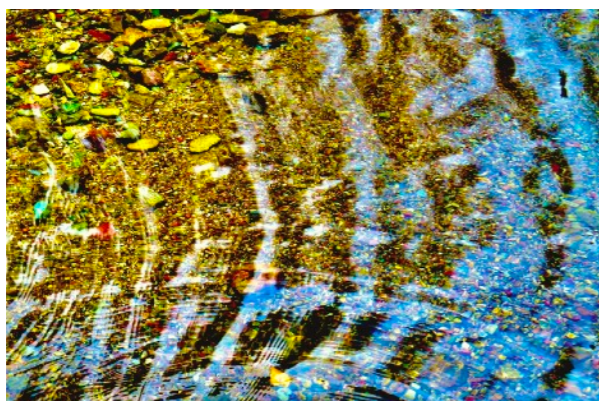
見失った道を
見つけるために

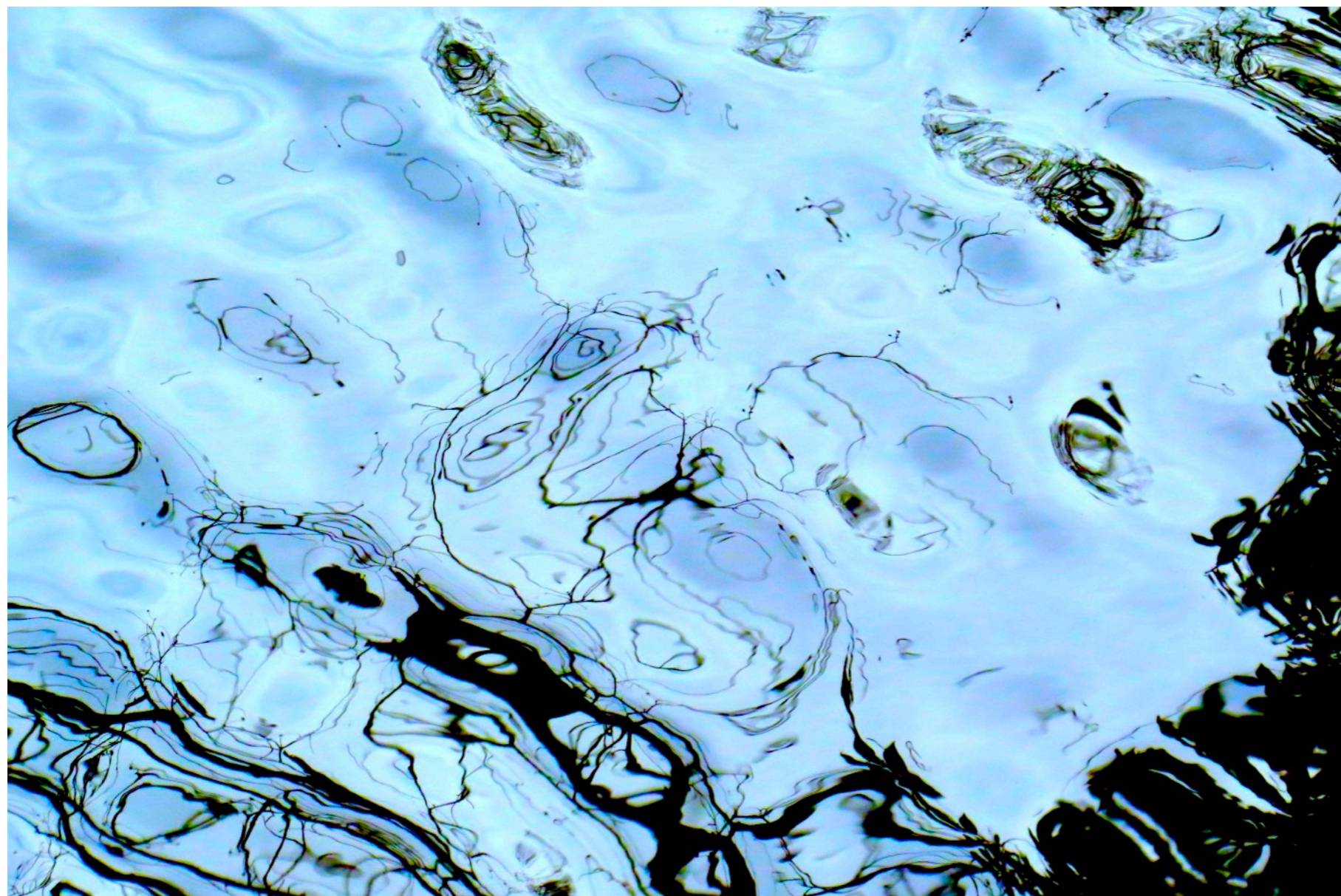
わたしたちは
内なる道を
辿らねばならない

見えない言葉は
いまでも歌っている

聴けなくなった言葉を
見つけるために

わたしたちは
内なる言葉で
歌わねばならない





この世は
夢か幻か

戦い
病い
競いあい

こんな世界に
だれがした

切れば
血もでる
痛みも走る

こんな体に
だれがした

苦しみ
悩み
悲しみだらけ

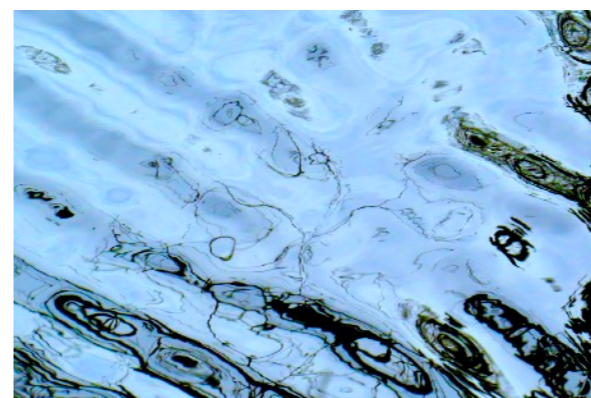
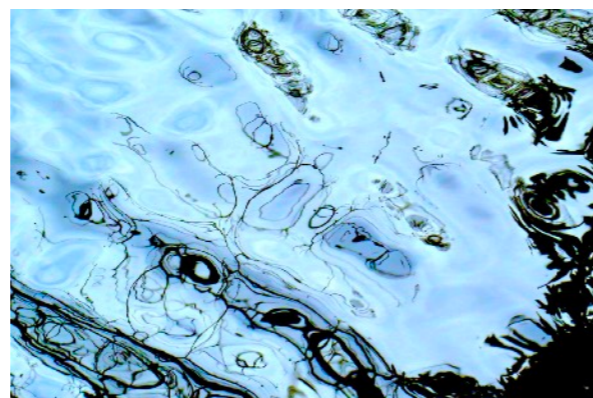
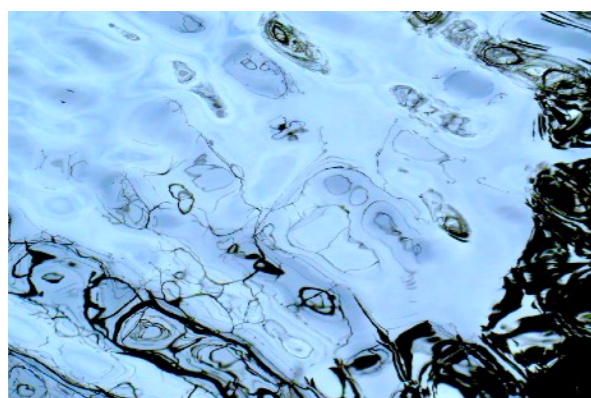
こんな心に
だれがした

わたしは
生まれ
死んでゆく

こんなわたしに
だれがした

わたしは
夢か幻か

夢と幻
すべてを背負（しょ）って
それでも
世界は
終わらない
それでも
わたしは
死んでも生きる





歩むことのできたところだけが
じぶんの世界になる
だれも歩もうとしないところへ
じぶんだけの足で

見ることのできたところだけが
じぶんの世界になる
だれも見ようとするところへ
じぶんだけの目で

感じることのできたところだけが
じぶんの世界になる
だれも感じようとするところへ
じぶんだけの心で

考えることのできたところだけが
じぶんの世界になる
だれも考えようとするところへ
じぶんだけの思考で

想像することのできたところだけが
じぶんの世界になる
だれも想像しようとするところへ
じぶんだけの想像力で

語ることのできたところだけが
じぶんの世界になる
だれも語ろうとするところへ
じぶんだけの言葉で





強くなければ
生きてはいけないのだろうか

強くなければ
優しくはなれないのだろうか

強くなければ
知ることはできないのだろうか

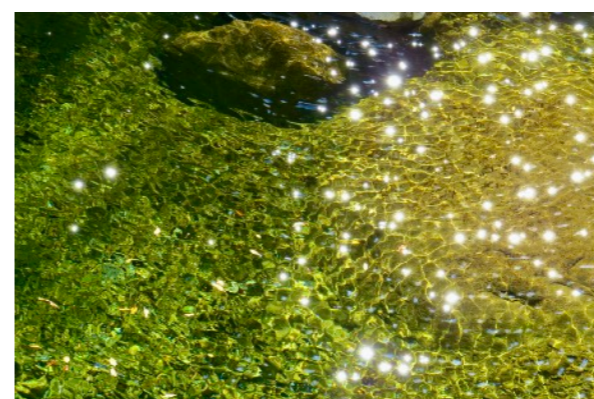
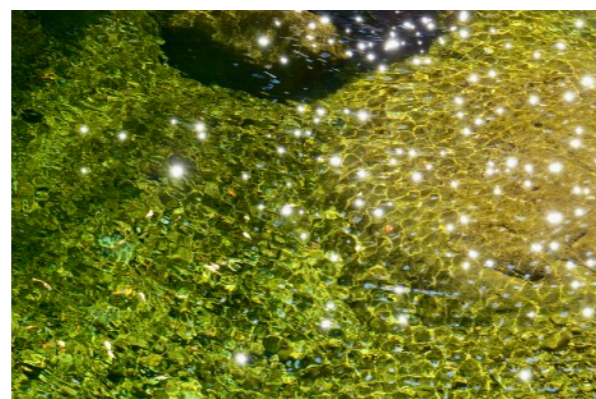
強くなければ
愛することはできないのだろうか

強くなければ
与えることはできないのだろうか

強くなければ
聞くことはできないのだろうか

強くなければ
祈ることはできないのだろうか

強さという門のまえで
克つことのいらぬ弱さとともに
わたしは立ち止まる





生きることは
矛盾である
その矛盾をどう生きるか

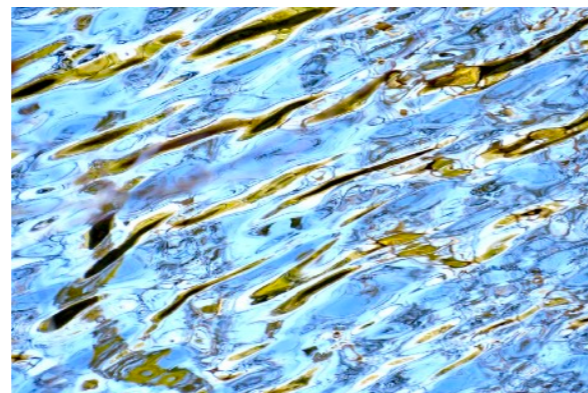
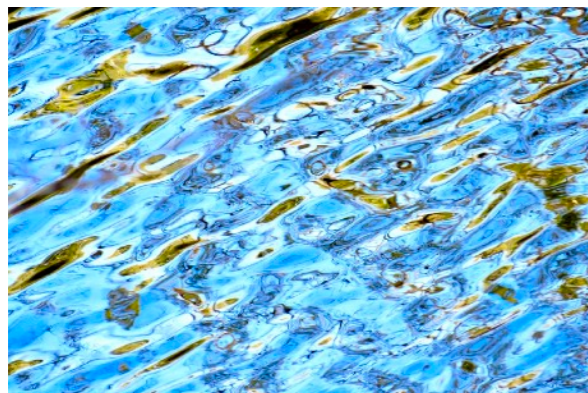
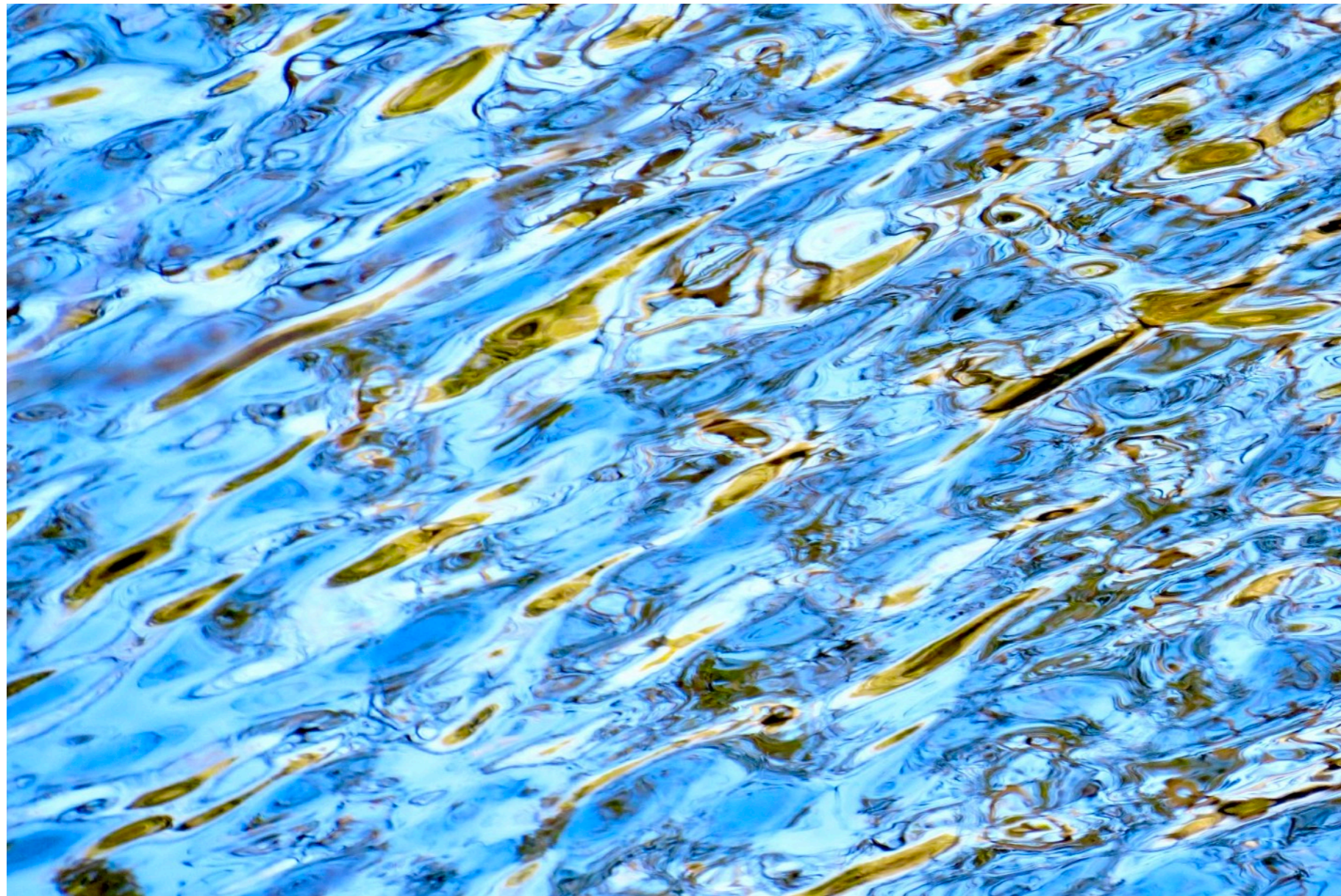
ある者は
矛盾ゆえに戦い
ある者は
矛盾ゆえに愛する

ある者は
矛盾ゆえに我を主張し
ある者は
矛盾ゆえに我をなくす

ある者は
矛盾ゆえに泣き
ある者は
矛盾ゆえに笑う

わたしというのは
矛盾である
あなたもまた矛盾である
その矛盾をともにどう生きるか





ひとりである
けれど
ひとりではない

ひとは
見えないものたちに
ささえられてある

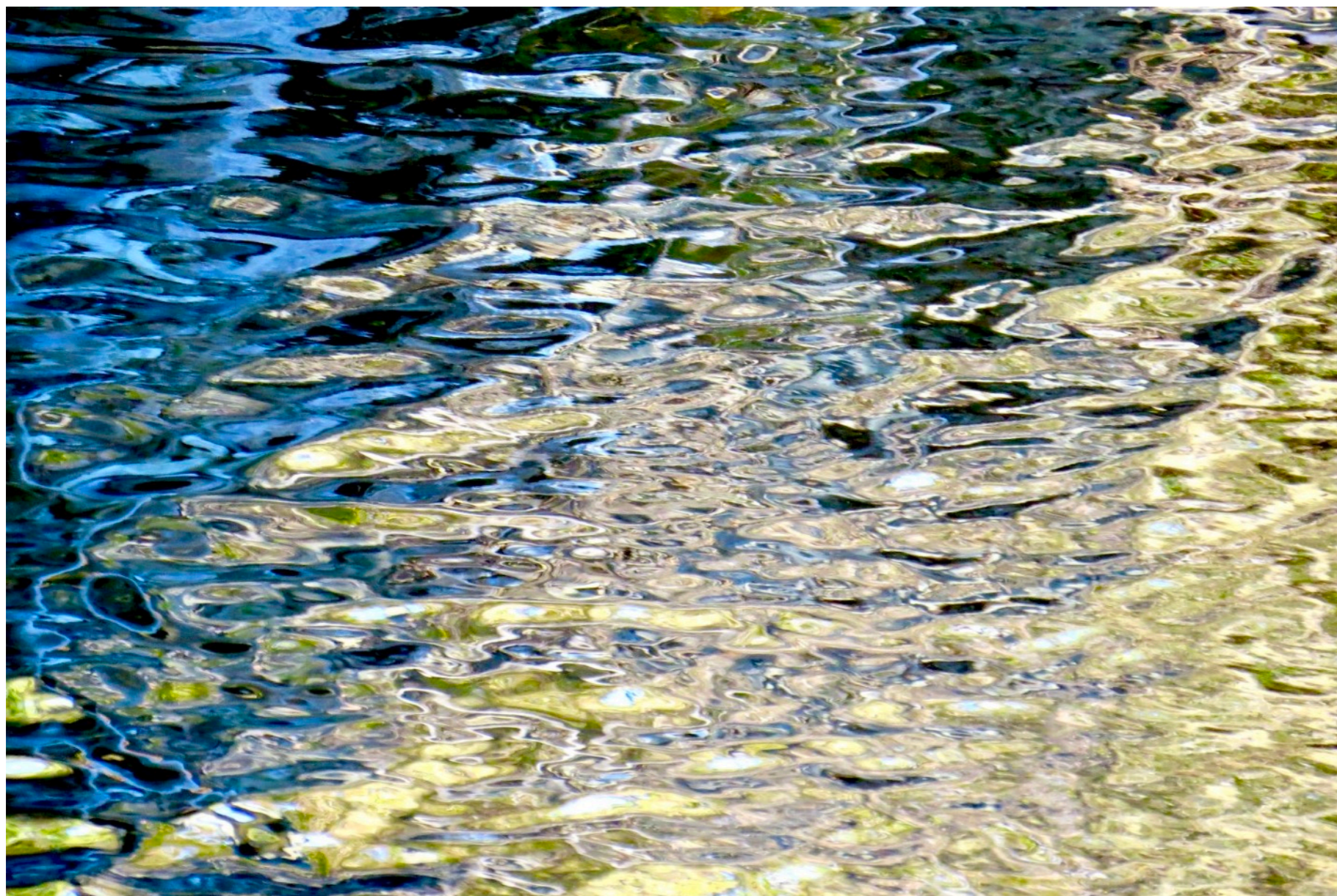
生きているということは
ささえられてあるということだ

見えないものたちのことが
わからなくなったとき
ひとは
ひとりであることの
ささえを見うしなってしまう

感じること
考えること
話すことも
ひとりではない

ひとは
たくさんのひとの
感情や思考や言葉とともに
織りなされてある

そのことが
わからなくなったとき
ひとはむしろ
ひとりであることの花を
咲かせるちからをなくしてしまう



その香りから
現れる景色がある

その記憶は
わたしだろうか
わたしという
他者だろうか

わたしは
わたしという他者は
その香りに溶けてゆく

その言葉から
現れる内在平面がある

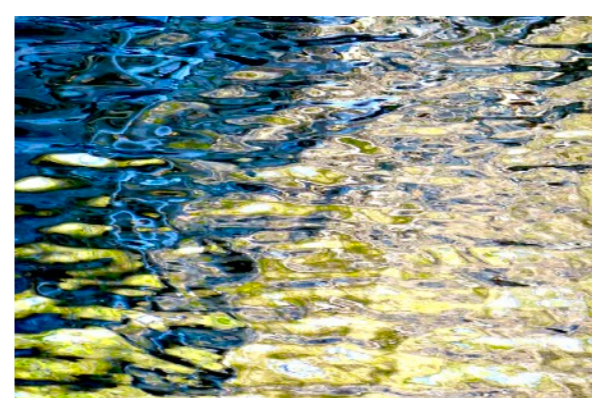
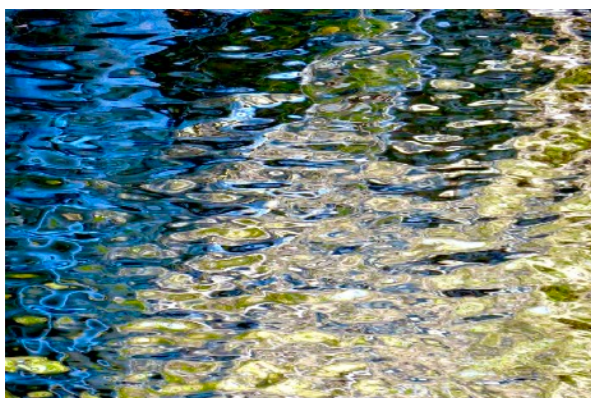
その思考は
わたしだろうか
わたしという
他者だろうか

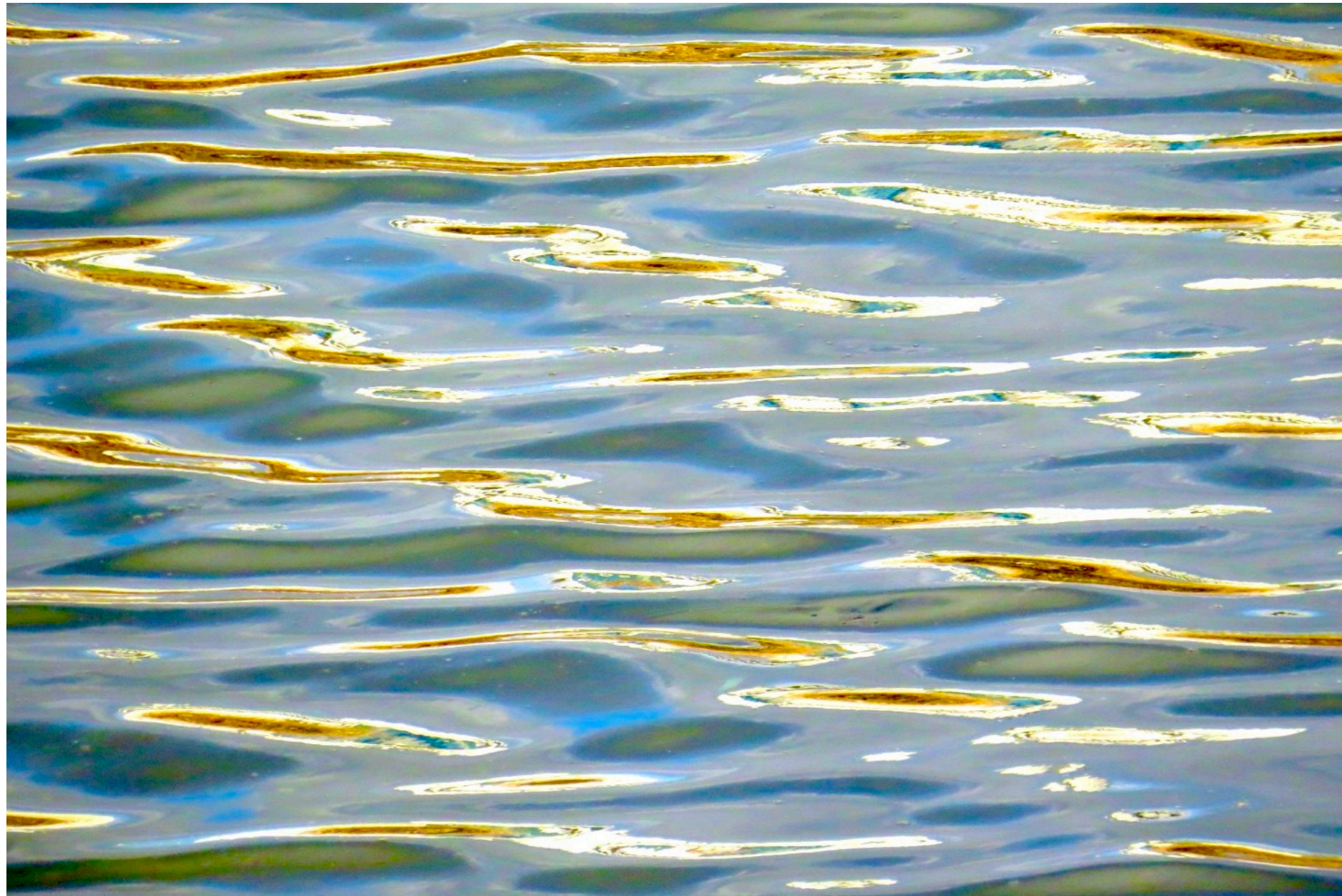
わたしは
わたしという他者は
その思考とともに生きてゆく

その歌から
現れる宇宙がある

その物語は
わたしだろうか
わたしという
他者だろうか

わたしは
わたしという他者は
その物語に紡がれてゆく





わたしがわたしである
ということは
わたしでないものがある
ということだ

わたしでないものが
わたしに世界を開示してゆく

わたしと世界のあいだには
結界があるが

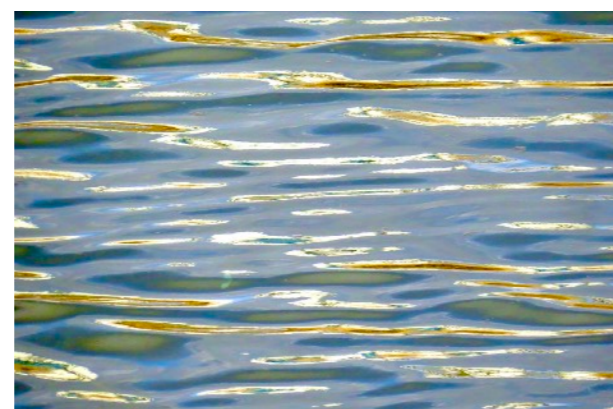
開示された世界で生きるわたしは
わたしとわたしでないもののあいだで
さまざまに翻弄されてゆく

結界を超えて
世界から与えられたもので
わたしは変わってゆくが

わたしもまた
結界を超えて
世界に与え
世界もまた変わってゆく

わたしがわたしであるためには
つねに結界を新たに結ばなければなら
ないから

そのことに堪えきれず
ときにわたしは
わたしという結界そのものから
自由になろうともするのだが・・・





炎になってしまうときは
炎を避けることなく
炎に焼かれることもなく
炎のなかでじぶんでいる

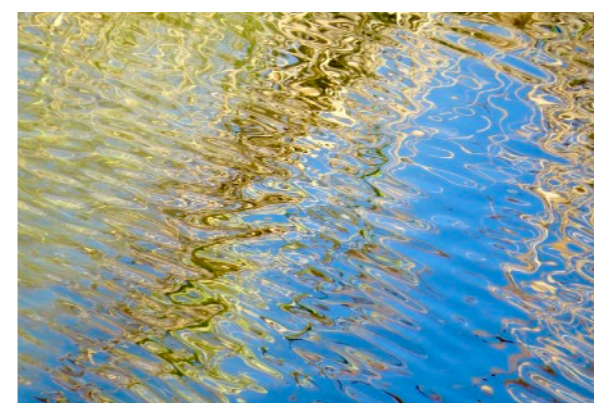
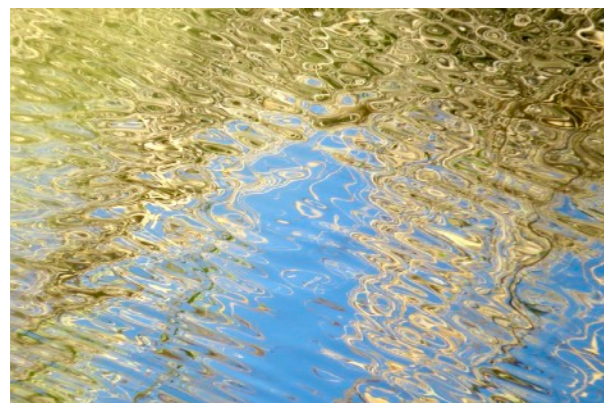
炎は
じぶんであり
じぶんではないから
炎を見つめ
じぶんを見つめる

そうして
炎が変わってゆくのを
じぶんが変わってゆくのを
じっと見つめる

悲しみになってしまうときは
悲しみを避けることなく
悲しみに拉がれることもなく
悲しみのなかでじぶんでいる

悲しみは
じぶんであり
じぶんではないから
悲しみを見つめ
じぶんを見つめる

そうして
悲しみが変わってゆくのを
じぶんが変わってゆくのを
じっと見つめる





知のために
知を求めるなかれ

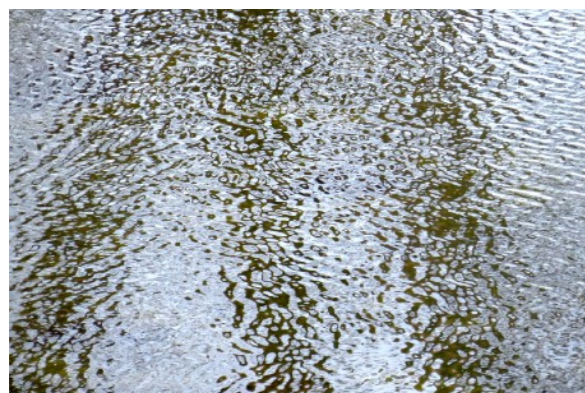
知を驕る者は
知によって自壊するが故に

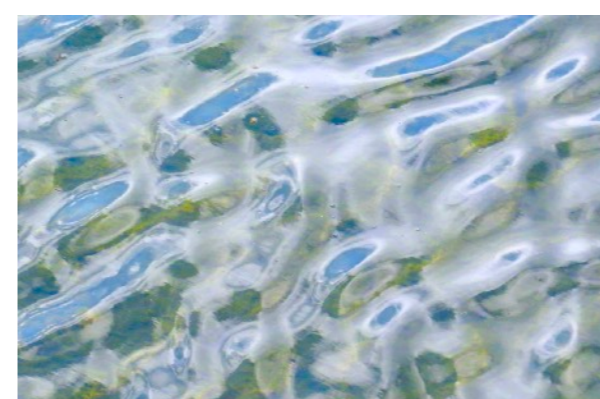
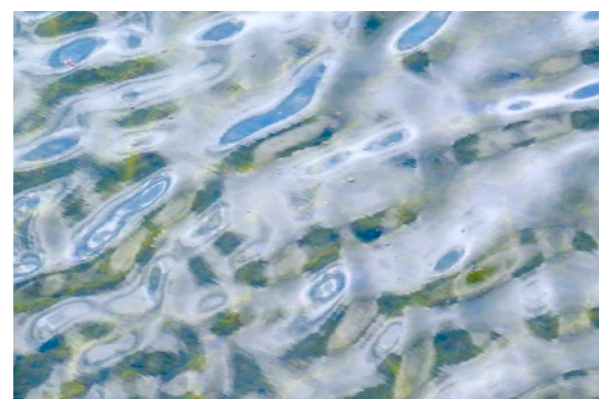
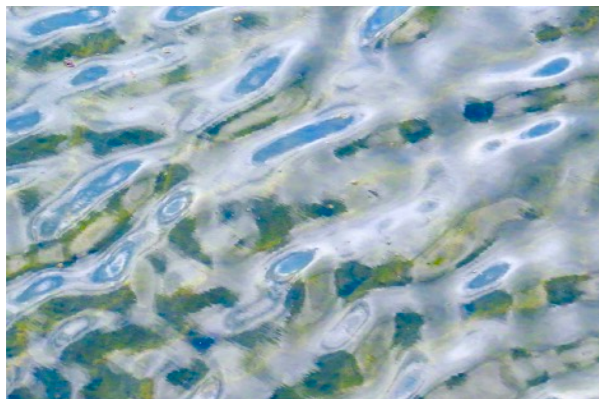
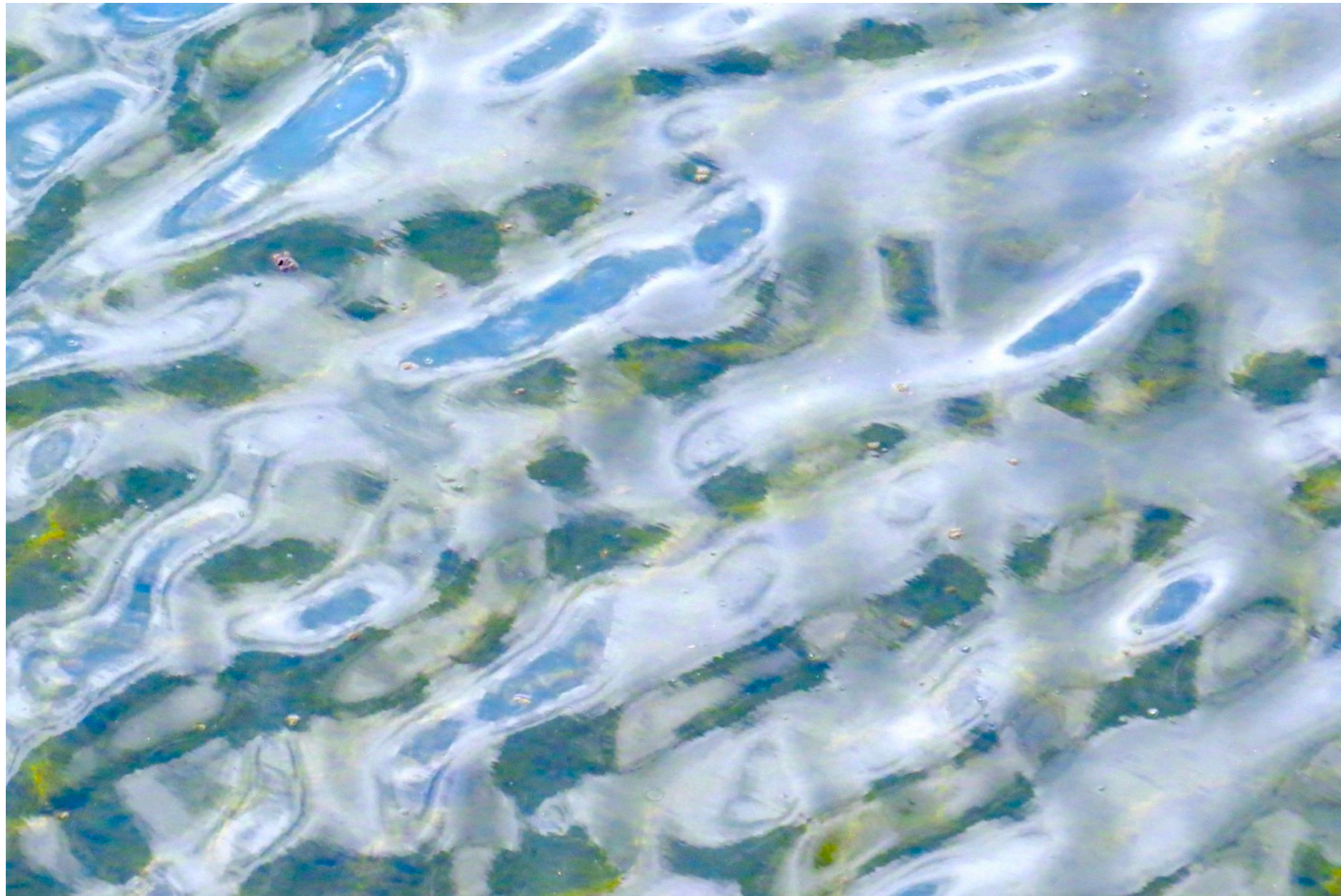
名のために
名を求めるなかれ

名を誇る者は
名の囚人となるが故に

我のために
我を求めるなかれ

我に執する者は
我に裏切られるが故に





精神が
ただの言葉
あるいは幻
とされる時代には

どんな経験も
形あるもの
見えるもの
計測できるもののなかにしか
存在しえなくなる

そこでは
精神の眼はなく
肉体の眼だけが
世界を存立させる

かつて
ゲーテは
原植物という
理念を経験したのに対し
シラーは
理念は経験できないとしたが

シラーは
経験のなかの理念を
認めることができなっただけで
精神の眼がないと思ったわけでない
むしろそれをどこかここから離れた
高次世界にあるものとして
理想化しすぎていたのだろう

見えないもののなかにも
見えるものがあり
見えるもののなかにも
見えないものがある

そして
わたしのなかにも
見えないあなたがいて
あなたのなかにも
見えないわたしがいる

わたしも
あなたも
ほんとうは
見えないけれど
そして計測できるものではないけれど
たしかに精神がかたちになったわたしがいて
たしかに精神がかたちになったあなたがいる